

## 青年期における外傷後成長と家族コミュニケーションの関係

深谷麻未

### 問題と目的

青年期は、自律性の増加に伴う両親との関係の困難や、進路選択や受験などを含む学校移行、友人との間で生じる葛藤など、ストレスフルな体験や危機的な体験を経験しやすい時期である。このようなストレスフルな体験が青年の不適応へのリスクを増加させる一方、ポジティブな変化や成長をもたらすことが示されており、こうしたストレスフルな体験からの成長やポジティブな変化を表す概念として外傷後成長 (Posttraumatic Growth; 以下, PTG とする) が挙げられる (Tedeschi & Calhoun, 1996)。

これまでに、家族の特徴や家族環境が青年の PTG 生起に影響を与えることが指摘されてきているが (e.g., Gil-Rivas, Silver, Holman, McIntosh, & Poulin, 2007), その特徴や環境は明らかにされていない。そこで、本研究では、青年の適応との関連が示されてきた家族の日常的なコミュニケーションの在り方 (e.g., Steinberg, 2011) を取り上げ、青年期の PTG 生起プロセスにおける家族コミュニケーションの役割について検討することを目的とする。本研究では、日常的な家族コミュニケーションの在り方を測定するために Family Communication Patterns (Ritchie & Fitzpatrick, 1990) (以下, FCP とする) 理論を用いる。FCP 理論は、家族内の意見や考えが同一であることを強調する程度を示す「同質性 (Conformity Orientation)」, 家族内でそれぞれの意見や考え、行動を尊重し、自由であることを強調する程度を示す「会話性 (Conversation Orientation)」の二次元から家族コミュニケーションを捉える。

本研究では、先行研究に基づき、FCP が反すうおよび家族に対する出来事の自己開示を介して、PTG に影響を与える仮説モデルを作成した。なお、先行研究に倣い、反すうを「侵入的反すう」と「意図的反すう」の2つに分類している (Calhoun et al., 2002)。侵入的反すうとは、意図せず生じる反すうを指し、抑うつやストレスの増大との関連が見られている。一方、意図的反すうとは、出来事の価値を見出そうと意図的に行う反すうを指し、PTG やコーピングとの関連が見られている。

### 方法

**調査協力者・調査時期** 大学生 442 名の協力を得た。回答に大幅な不備のある者を除外し、18 歳から 25 歳の

大学生 369 名 ( $Mage = 19.4$ ,  $SD = .91$ ) を分析対象者とした。

**調査方法・調査内容** ①基本属性：協力者の年齢、性別について尋ねた。②ストレスフルな出来事の選定：中高生の間の最もストレスフルな出来事を尋ね、6つのカテゴリ (人間関係/自分自身/学業/家族/死別/その他) から選択し、内容について記述するように求めた。③PTG の測定：Japanese-version of Posttraumatic growth inventory (Taku et al., 2007) (以下 PTGI-J とする) を用い 6 件法で回答を求めた。④中高生時の家族コミュニケーションの測定：Revised Family Communication Pattern instrument (Ritchie & Fitzpatrick, 1990) (以下, RFCP とする) を用い、同質性および会話性を測定する 26 項目について 5 件法で回答を求めた。⑤反すうの測定：Japanese-Version of Event Related Rumination Inventory (Taku, Cann, Tedeschi, Calhoun, 2015) (以下, ERRI-J とする) を用い、侵入的反すうおよび意図的反すうを測定する 20 項目に関して出来事直後および現在の 2 時点について尋ね、4 件法で回答を求めた。⑥家族への自己開示の測定：ストレスフルな出来事に関して、家族への自己開示欲求の有無および家族への自己開示行動の有無について尋ねた。

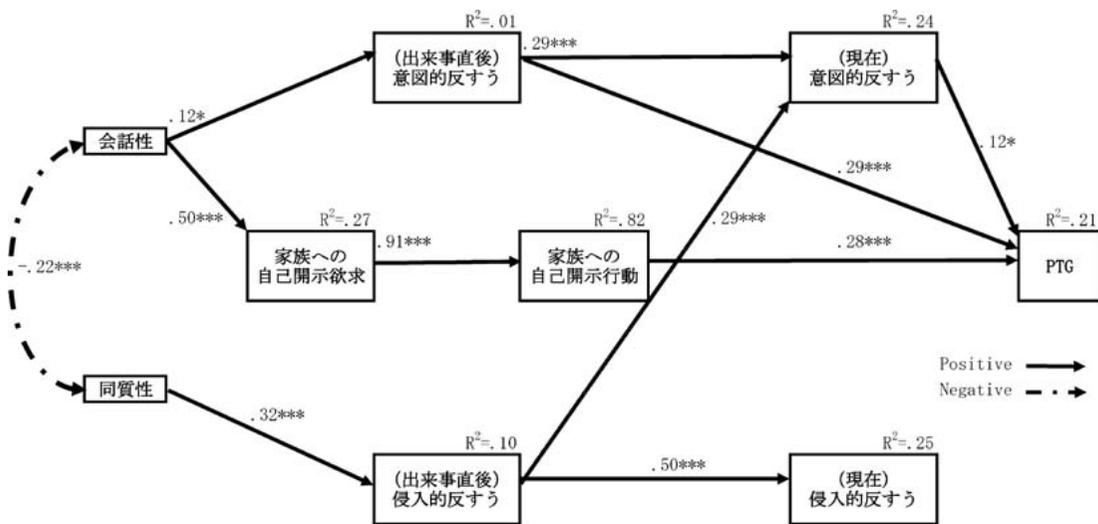
### 結果と考察

**RFCP 尺度の因子分析** RFCP 尺度について、本国における因子構造の妥当性を確認するため、再度因子分析を行なった。主因子法による因子分析の結果、2 因子構造が妥当であると判断された。因子負荷量の低い 3 項目を除いて、原版と同様の因子構造が得られ、第一因子を会話性、第二因子を同質性と解釈した。

日本は、高文脈コミュニケーション (Hall, 1976) 文化であり、言語化は必ずしもポジティブに捉えられず、明確に言語されることなく家族と価値観や考えを一致するよう求められることが多いと考えられる。RFCP は行動面でのみしか同質性をとらえられておらず、Shearman & Dumlao (2008) に指摘されるように、高文脈文化において家族内で共有されている暗黙のルールを測定できていないという問題が存在する。RFCP の日本での適用については、本国の特性を十分に考慮して理解する必要があると思われる。

**共分散構造分析による仮説モデルの検証** 家族コミュ

青年期における外傷後成長と家族コミュニケーションの関係



注) GFI = .981, TLI = .964, RMSEA = .059, SRMR = .042

各時点での反すうの誤差変数間に共分散を仮定しているが、図の煩雑化を避けるために誤差変数および誤差共分散は省略した。また、非有意なパスは省略した。p<.001\*\*\*, p<.01\*\*, p<.05\*

Figure 1 家族への自己開示および反すうを媒介とした家族コミュニケーションとPTGの関連

コミュニケーションとPTGの関連を検討するために、先行研究を基に作成した仮説モデルについてMplus Version 8.1を用いて検証した (Figure 1)。なお、出来事直後および現在における各反すうの誤差変数間にそれぞれ相関を仮定した。「家族への自己開示欲求」および「家族への自己開示行動」をカテゴリカル変数とし、重みつき最小二乗法 (WLSMV) を用いた。適合度指標は、GFI = .981, TLI = .964, RMSEA = .059, SRMR = .042と概ねモデルの当てはまりは良いことが示された。

結果から、家族コミュニケーションパターンが出来事に関する家族への自己開示および反すうを介して、PTGを促進するモデルが認められ、家族の持つ自由で、個人の意見を尊重するコミュニケーション風土が、ストレスフルな出来事を家族に開示することや出来事直後の認知プロセスを促進することを通して、青年のPTG生起に貢献することが示された。

会話性が家族への出来事の開示を介してPTGに影響を与えたことから、家族が持つ自由に話し合いができる雰囲気は、出来事を家族に開示したいという欲求を高め、家族への開示行動に繋がり、家族への開示行動がPTGを促進することが示され、自由で会話の多い家族のコミュニケーション風土は、青年がストレスフルな出来事から成長を得るための基盤になると考えられる。

また、出来事直後の意図的的反すうおよび現在の意図的的反すうがPTGを促進すること、出来事直後の侵入的的反すうは現在の意図的的反すうを介してPTGを促進することが示された。したがって、個人がより意図的に、建設的な反すうに取り組み、経験からのポジティブな変化の可能性を認識すればするほど、個人はPTGを経験すると考えられる。さらに、侵入的的反すうそれ自体は非生産的な認知プロセスであり、PTGに直接影響を与えないが、より建設的で生産的な認知プロセスを始めるための土台作りとして、機能を果たしていると考えられる。

会話性が出来事直後の意図的的反すうを促進し、同質性が出来事直後の侵入的的反すうを促進することが示され、Hafsted, Gil-Rivas, Kilmer, & Raeder (2010) による開放的で会話の多い家族の雰囲気がストレスフルな体験に対する認知的処理を促進する可能性があるとの指摘を支持する結果となったと考えられる。

**本研究の課題と限界点** 本研究の限界点として、本研究は一時点における質問紙調査であり、出来事やコミュニケーションについて想起法で回答を求めているため、因果関係については慎重に考えなければならない点、家族コミュニケーションとPTGの関連を検討する上で、家族形態を考慮していない点、外傷性や情動喚起の程度を考慮していない点があげられる。